



# 生活困窮者自立支援全国研究交流大会

パンデミック下の狭間・孤立・困窮問題と制度(支援)が向き合う課題

分科会 2021年11月14日【日】10:00~16:00

オンライン開催

大会ニュース3号

発行:2021年11月20日

分科会 1 伴走型支援 10:00~12:00

## 伴走型支援の視点を考える—愛知の実践を通じて—

生活困窮者支援で注目を集める伴走型支援について、さまざまな支援現場の「実践知」を4人のパネラーが報告。

### パネラー

一般社団法人草の根ささえあいプロジェクト 代表理事 渡辺 ゆりか  
生きづらさの背景に関係性の困窮がある。日常をともにする関係性の構築が必要。一般市民約200人がサポーターとして「友だち以上家族未満」になる。地域の力を信頼。

NPO法人くらしの応援ネットワーク居住事業部 部長 吉田 全良  
更生緊急保護で当法人が運営する自立準備ホームに入居した高齢男性。「最期までホームに」の意志を尊重し、看取りを行った。葬儀、墓も手配。支援は一生涯の付き合い。

NPO法人知多地域成年後見センター 理事長 今井 友乃  
センターの非常勤スタッフには主婦など普通の住民も多い。後見は生活者の視点で考えることが重要。管理・指導ではなく、被後見人が地域で自分らしく暮らすのを応援。

社会福祉法人半田市社会福祉協議会 事務局次長 前山 憲一  
福祉事業所と中学校区の多機関連携会議を設置、協力事業所に窓口を開設。相談をCSWが受け止め、専門機関につなぐ。子どもの場合は学校と連携。身近な地域で受け止める。

### コメンテーター

認定NPO法人包棟 理事長 奥田 知志  
問題の本質はつながりの喪失。それは人生の「物語」を失うこと。伴走型支援とは物語を失った人に寄り添い、つながり続けることだ。つながりの回復が新たな物語を生み、生きる力となる。

### コーディネーター

日本福祉大学社会福祉学部 教授 原田 正樹  
伴走型支援は、支援のなかで生まれた実践知。課題解決の支援を越え、日常を作り出すという伴走であり、ナラティブを大切に。関わりを通してどんな社会を創出していくかの哲学かもしれない。

分科会 2 子ども若者支援 14:00~16:00

## 子ども・若者支援は「孤独・孤立」にどう向き合うのか？ ～第3次「子供・若者育成支援推進大綱」が示す「現在」と「未来」～

子ども・若者が抱える課題と背景を、調査と現場実践から紐解き、求められる支援について議論した。

### パネラー

中央大学文学部 教授 古賀 正義  
子供・若者育成支援推進大綱は、方向性を示すものではあるが、動き出したばかり。デジタルネイティブ世代のコミュニケーションの変容や、ナイーブな感覚に対応する支援が求められる。

公益財団法人あすのば 代表理事 小河 光治  
コロナ禍で独自に緊急支援給付金に取り組み、物心両面で家族を丸ごと支えてきた。すべての子育て世帯への普遍的施策の拡充と、困難を抱える世帯へのより手厚い支援が必要だ。

公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会 子ども若者支援担当部長  
札幌市若者支援総合センター 館長 松田 考  
若者支援は就労がゴールではなく、家族機能の社会化がテーマ。ユースワークの貧困が若者層にダメージを与えている。2つの法定協議会の隙間にある社会課題を見落としてはいけない。

A'ワーク創造館(大阪地域職業訓練センター)  
副館長・就労支援室長 西岡 正次  
働く貧困層が、働きながらキャリアを模索・形成できる仕組みが求められる。雇用対策ではなく、就労支援としての職業相談に自治体が取り組むべき。

### コーディネーター

認定NPO法人スチューデント・サポート・フェイス 代表理事 谷口 仁史  
支援を受けることに抵抗感のある世帯は多く、誰もが受けるのが当たり前という文化の醸成が求められる。現場が子供・若者育成支援推進大綱の内容と実態に関心を持つことが重要。